宮田秋堂先生
諸大家名士
作曲

縮刷
大正版

曲譜附
獨奏書

東京 朝野書店發行

薩摩琵琶歌
音譜集

目錄

明治天皇
乃木大將
武石浩玻
伊藤公
別れの盃
雪晴れ
城山
常陸丸
白虎隊
那須與市
金剛石
櫻がり
臺灣入
川中島
石童丸
別れの國歌
橘大隊長
廣瀬中佐
毒饅頭
本能寺

新刊

薩摩琵琶歌音譜集

朝野書店藏

VELUT ARBOR ÆVO

Presented to the

LIBRARY *of the*

UNIVERSITY OF TORONTO

by

Mr. E. Tamaki

LIBRARY

SEP 17 1996

UNIVERSITY OF TORONTO

序

古、ヘルクレス、ヘクトルを追ひて、トロイの城壁を周匝し、エーニアス父を負ひて、ボスホラスの海峡を渡泳す。豈わが重盛と義平とが右近の櫻に馳驅し、左馬の介光俊が琵琶湖を渡れるに似たらずや。或はロドリゴの復仇の如き、アーサーの最後の如き、皆これ勇壯にして悲壯なる英雄文學なり。わが琵琶歌の如きは卽ち、其の目的と內容とに於て、最も能く是等英雄文學に必適せるもの。宜なるかな、今や琵琶の隆盛其の頂に達し、寒村僻地に至るまで四絃の聲を耳にすることや。從てこれに關する書の上梓せらるゝもの汗

牛充棟も啻らず、而かもこれが出版者たゞ射利に汲々乎として徒らに歌曲を増して、紙數の多きを貪り以て洛陽の紙價を貴からしめんと欲す、杜撰孟浪知るべきのみ。吾人これを嘆くこと久しかりき。朝野書店發行するところの琵琶音譜集、輯むる新舊歌曲十數種皆これ人口に膾炙せるもの、而して作譜親切を極め、校訂嚴密を加ふ。一讀誠に從來のものと選を異にせるを知るべし。吾人は殊に初學者の指南車として他に類を見ざる良書を得たるを喜ぶ。

琵琶新聞社編輯局に於て

胡春しるす

薩摩琵琶歌音譜集

目次

◉彈奏者の心得……四
一　彈奏の態度……四
二　歌に對する注意……七
三　音聲の修養……一〇
◉曲譜の說明……一四
◉音譜符號……本文初

曲目順序

新作之部

明治天皇千代田之露……（至誠は民の範となる）……飯田胡春作……二
乃木大將……………（秋來ぬと）……………飯田胡春作……七
武石浩玻……………（開けゆく）……………西村天囚作……一七
噫々伊藤公…………（桐の一葉の）…………守田橋外作……二〇
別れの盃赤垣德利の別れ……（利刀は踏に難からず）……宮田秋堂作……二五
雪晴れ義士討入………（薪に臥し膽を嘗め）……宮田秋堂作……三一

舊作之部

城山………（夫達人は大觀す）…………………勝海舟作……四〇

常陸丸……(征露の軍やう／＼進み)……池水義衆作……四三
白虎隊……(花は櫻木人は武士)……小田錦蛙作……四七
那須與一……(四國八島の荒磯の)……不詳作……五四
金剛石……(金剛石も研かずば)……皇后陛下御作……五八
櫻狩……(霞棚引く山々の)……吉水經和作……六一
臺灣入……(皇の御稜威は)……西村天囚作……六六
川中嶋……(天文二十三年)……吉水經和作……七二
石童丸……(月に村雲花に風)……四竈大人作……七八
別れの國歌……(共に詠めし月影も)……小田爲岩作……八六
橘大隊長……(奥大將のもとにある)……吉永經和作……九〇
廣瀬中佐……(七度も生きかへりつゝ)……井上秋劍作……九九
毒饅頭……(笑へは子女も懷かしめ)……木村貫一作……一〇三
本能寺……(麻を亂るゝ戰國の)……小田錦蛙作……一一〇

目次(終)

彈奏者の心得

言ふまでもなく琵琶は彈、奏二つながら完くないと引立たぬ、其れを兎角片落ちになる人が多い、と云つて兩方出來る人でも應用が惡いと、折角能く彈じ、能く奏じても何にもならぬことになる要するに此れ等のことは平素の練習と心掛けとによるものである。今左に其の心得となるべき事項を述べて諸君の參考に供することにしよう。

一 彈奏の態度

由來、琵琶は簡單なる構造の中に、天の理、人の道洵に無限の意味が含まれ、其の妙音を以て無明の煩惱を斷絕し、歌亦宇宙の深遠なる道理を悟り人情の極致に觸れざるものなく、以て粗暴驕勇を戒め、沈勇を鼓舞し、精神の修養を謀るものである、斯る崇高なる琵琶を彈奏する際にはよく注意して、決して輕卒なる擧動があつてはならぬ。卽ち第一に氣を附けなければならぬことは姿勢卽ち態度である。態度の如何によつては聽者をして自から襟を正さしめ、また反對に惡感情を抱かせることがある、姿勢は成るべく自然に眞直にして、決しし崩してはならぬ。節廻しに連れて首を前後左右に矢鱈

に振り廻はす人があるが、まるで張子の虎のやうで餘り體裁のよいものではない。勿論高い聲を出す時などは多少首の動くことは已むを得ないことであるが、斯かる事は絶對の禁物として、飽迄嚴然たる態度と持する樣心懸けられたいものである。又顏を色々にする人があるがこれも注意せねばならぬ、笑顏の如きは殊に聽者をして輕侮の念を起させるものである。諸君は所謂藝人でない、決して强ひて客の愛嬌を貰ふ手段を講じなくともよいのである。澁面作るのも宜しくない。要は眞面目に、而して心樂しく彈奏するにある。其他首を曲げたり、或は體を屈めたりすることも勿論惡い癖である。

それから附加へて云つて置きたいのには、彈奏する場合に臨んでから調子を何度となく直したり、又調べに下段或は中段を彈いたりする人がある、これはいづれの點からいつても餘りよろしきものではない、演奏臺、或は彈奏する場所に行く前に能く調子を定めて置かねばならぬ。若し其の暇がなかつたなら成るべく早く調子を合せて彈奏するを宜しとする。

二　歌に對する注意

琵琶歌は前にも述べた如く、己れの精神を修養し兼ねて人を敎化

する高尚なるものであるから、歌を謠ふ際には先づ歌の意を了解し歌中の人とならねばならぬ、彈奏家にして己れの謠ふ歌の意味を氷解して、文章を間違へずに居るものが果して幾人あるであらうか。弑逆をさつぎやくとしたり、惟任光秀をすいにんみつひでとしたり錦の直垂をにしきのなをたれとしたり、矢石を犯しつゝをやせきをおかしつゝとしたり、殆ど噴飯に堪へないものが少くない。こんな事で人を感動させることが出來ようか、切角の歌も滑稽に葬つて仕舞ふ、だから常に歴史、物語などを讀で其の歌中の人物の性格なり時代なりを知て置くとか、又先輩や其道の人に文章などの不審な點に

就いて教へを乞うて、語法などの誤りに至る迄決してしない樣に研究的態度をとつて欲しいものである。文章の意味が判然せずにうまく歌はうなごゝ思ふのが抑も誤りである。

又歌曲は飽迄も熱心にして、眞面目に、かつ自然でなければならぬ。無暗に技巧を弄してはならぬが、歌中に現はれた人物、背景に自己の經驗せる悲哀、憂愁、其他の感情を應用して謠はなければならぬ。即ち表情といふ事も必要になつて來るのである、と云つて表情も過ぎては却て妙なものとなつて仕舞ふ、要するに程度問題である。

三　音聲の修養

俗に一聲二節といふことがあるすなはち。聲の美しいのはまことに德である。しかし又必らずしも美聲でなくとも强弱緩急に由つて人を感動させることがある、玉磨かざれば光なし、磨けば磨くだけ光が出る。音聲は常々からよく心がけて硏究せねばならぬ。自分は聲が惡いと云うて決して悲觀するには及ばない、熱心に練習すればよくなるものだ。又折角の美聲でも不攝生のために惡くして仕舞ふことがある。それには平生の修養が必要である。

「良き聲を得たいならば良き身體を作れ」と古の樂聖は訓へた。確かにこれは眞理である。弱い身體から美しい聲は出ない。たとへば痩せ衰へた蔓からは甘い瓜は決して生らないやうなものである。聲を修養せんと欲するものは先づ以て身體を强壯にしなければならない。話の順序として次に彈奏家の攝生法とでもいふものを述べよう。

一、毎日一定の時間練習すべきこと。

二、風邪にかゝらぬ樣にすること。

三、喉頭の炎症を起さぬ樣注意して毎日含嗽をなすこと。含嗽劑

には明礬水、鹽剝劑や其他色々の藥があるが鹽水で澤山である。卽ち淸水一〇〇、〇の中へ製精食鹽一、〇を入れて冷水にて用ゐるか、又は微溫水で用ゐるかするがよい。

四、滋養物を食して、身體の營養を良くすること。

五、情慾を節し、睡眠を充分にとること。

六、食事の平均を計ること、不時の暴食は聲音樂人の大禁物である

七、酒、煙草、其の他刺戟物を避くること。

元來酒は聲には惡いものであるが、彈奏者の中には少し飲酒した時の方が聲が能く出るなど、云ふ人があるが、これは病

茶の理を解して居ない人の談である、甚しいのは或る大家は、茶と煙草と酒とにムセなければ眞の聲は出て來ぬというたが實に無法な言といはねばならぬ。

煙草は酒より更らに惡いとしてある。

或る西洋の音樂家が、酒と煙草とを用ゐる人は聲樂家として成功する資格なきものなりとまで戒めたが凡そ此れ位の心懸けがなくてはならぬ。

曲譜の說明

○　大干　吟者の最も高き音聲にて歌ふべきものにしてブツキラボーに語尾を落すものさ、普通の棒讀みにて、要所々々に力を入れるものと、以上を連續せしものと三つある。

、　中干　「地聲」と「大干」との、間の音にして、結末の句にのみ節を用ゐる。

◎　切り　文章の段落なればは大聲にて歌ひ、順次に下げ

・・ 吟變り

ゆきて語尾を上げて落し切るべし。

文章の悲哀の骨子とする處に殆どこの吟變りを用ゐあれば、亦其の心持を以て最も悲哀の調を以て歌ふべし、而して、これには地と、干と及び干より地に落さするものとの區別ありと知るべし。

× 崩れ

多く文章中戰ひの有樣を述べたる所等に「崩れ」を入れたれば、吟者亦其れだけの用意を以て、調を早め緩急の度を失ふことなかるべき

を要す「吟變り」と同じく、地、干、及び干より地に落すものあり。

聲を最も强く。
聲を最も弱く。
聲の終を長く引き下ぐ。
聲の終を長く引きあぐ。
聲の終を引き、震はせ下ぐ。
聲の終を引き震はせ上ぐ。

琵琶歌にはもとより一定の節はない。吟者に於て研究すべきで

ある。しかし何等かの標準なくして吟者之れを考へるのは頗る困難な事である。茲に於て歌譜の必要を生ずるのである。但し歌譜は其の標準を示すものであるからして必しも、吟者がこれに依らなくてもよろしい。

薩摩琵琶歌音譜集終

音譜記号

太チ	聲を引き震はせて下げる
中チ	聲を一寸引く
切	聲を上げて引く
吟替	聲を上げ力を入れて止る
山附	聲を下げ力を入れて止める
地の変化	聲を止る
聲を強く	節を廻す
聲を弱く	聲を引く
聲を引き震はせ後廻す	聲を引きて止る
聲を引き震はせつゝ止める	弾き方合の手

薩摩琵琶歌音譜集

(明治天皇)千代田ノ露

飯田明春先生作歌

秋来ぬと、目にはさやかに見えねども、風の音信自から、悲愁の聲に沈み来て、今も涙の新たなる、茲に明治の帝には、天資英武にましますて、仁義の御心深けれバ、八洲の雲も治まりて、波も音なき四つの海

抑、國を治むる王籍の道なる道は、外つ國に施すともも
とるなし、されば麻と乱れし東洋の、平和の盟主と
なり給いて、弓矢の道正しければ、東南雲治まりて
西北風靜かなる世に、澌る芽出度きためしとて、民喜び
の聲に充ちて、君が齢は玉椿、千代に八千代の末かけて、幾
久しかれと祈るなる。さばそ月は隈なき、後夜の鐘、いつか
は雲の恨みある世、花は盛りを朝の空、山風の嘆きなきのみ世や。

噫思ひ出づるも涙なるを、明治四十餘りの五年の、文月半ば過ぎる日、大内山は空曇り、愁しき雲に蔽はせて、世界の英主と仰ぎし、我が大君はあやなくも、重き病に臥し給ふ、雲の上人始めとし、津々浦々の民草も、身をば捧げて祈りしも、あゝ甲斐もなや御悩、日々に重らせ給ふなる。わけて帝都に住む民は、老も若きも諸共に、袖を連ねて二重橋、高木もいきる炎天に、流るゝ汗は滝なせど、拭ひも

されば地に伏して、よしや御高家の泡沫と、此身儚く消ゆとしも、
なずら嚴はん茶君の、御悩平癒しませば、歓び何に
譬へんや、松の下露起きもせず、眠らで夜を明かしける、
御痛ましや畏くも、后の宮を御始め、竹の園生の御方々、
伊勢の神風吹きすさして、今一度の御平癒を、御心おかし
めし御看護も、効はなくて敢なくも、其月末の日を限り
」、民の歎きの其中に神去りゆかしまぞ悲しき。

子等は皆軍の旗にしたがひはてゝ
翁やいほりの山田守るらむ。

かつて日露の御軍に、満洲の野に戦ふ将士の身をば
思召しゝ、かく宣ひし御心を、在しつる日の偲び草、涙ぬ
雨や灑ぐらん、さは去り乍ら今は早、萬機にます御子
御座し、已に御践祚ありしかば、雲井へだてゝなき君も、
御心安く思召して、千代田の宮の御園なる、松の緑の色深く

く 幾千代かけて栄ゆらん。

乃木大将

鷲田胡春先生作歌

忠誠は民の範となり、道義は国の誇りなる。乃木陸軍大将が、君に殉せし最後こそ、世に壮烈の極みなりし。金州城外馬とめて、斜陽に立つと詠じけん、老将軍の俤も、今は果敢なし諸果てゝ、秋吹く風の蕭颯たる、千草の陰にすだく虫、聲さへいとど哀れなる。

憶へば十年の戰に、運祺を敵に奪はれて、既に一死を誓ひしが、死所を得ざれば本意ならねど、徒し月日を送りけるに、日清日露の兩役に、露營の夢を重ねずして、馬革に屍包まるゝ、機もありしに遂になかりしが、わけて旅順の戰に、難攻不落と誇うてし、敵の堅城陷されし、爾靈の山かし其功、外の國迄も響けられ、萬骨枯さし靑らきまで、亡き兒を歎くのみでありき、花咲も

優る深し昔は、千代に香かぐ薫るらん。

王師百萬征驕虜、野戰攻城屍作山、
愧我何顔看父老、凱歌今日幾人還、

吟ぜや黄金も玉も何かせん、誠の寶は子なるぞと、古人も歌ひしが、花の公達二人迄、先立たせ給ひし将軍の、心の中や如何なりし、先帝崩御ましゝ時、英姿悲哀に包まれて、帝が暮ふ妙なすが、神靈の前にひれ伏

して、「生きてし君寵極まりぬ。命は甲斐なき。此の命、永遠の行幸に従ひまゐらせ、君に殉じまゐらんかし、遺書は委しく認めき」、瞬維き轜車の過ぎし日、静子夫人を呼寄せし、心の中は明かしが、流石に武士の妻なりきや、衣ば秘めし其涙、心ぼくしは人や知る、頃は長月十三日、涼闇の空月細く、悲愁の情も自ら、民の心に通ふなる。折しも轟く號砲の音、轜車發しぬと知られけり、将軍自ら

謹みて大内山に伏し拝み、」

りまし母が神寺へまいりし、大君の

御跡慕ひて我も仕へまつらむと

遠近寺々の鐘の音、未だき絶えらぬ其の殿に、玉散る剣抜き放ち、

潔く一文字に搔切りて、返す刃に喉笛を、断ちて君前に伏し

にけり、妻は最後を見届けて、妻も後より御供せん、恋

しき夫も待つらんと、御意の短刀取出し」

咲きまして かへます日の本に しかるべき

まいのみゆきに あふぞかなしき、

と一首の和歌をかきのこし、心乱さで見ん御事に、自害をなしをはり果てにける、見ずや勇士の最後、見ずや烈婦の其今際、尊き血汐に濁りゆく、世の人心洗はずや、朝日照て添ふ秋の霜、よしや日の本の精華ならざる、一家挙って君の為、生命を捧げまつりにし、忠勇義烈の輝は、達

武人普請公へ、それと共に並んで、警言は吾々に残すらんへ。
警言は吾々に、のこすらん無形。

武石浩玻

西村天囚居士作歌

開けゆく、我皇の大御代は、翼なすまで天翔る、風
に乗じて雲を披く、飛行術をぞ勇ましけれ、萬里
に翔りつつ大鵬の、図南の翼何かあらん、人の力は天に
勝つ、地も窮まらんはずのあるまじ、戦略さへも亦将に、

変せんとする勢に、国々競ひて此の技を学べる中に我国も、堅石諸技其人ぞ、世に誇らしき勇士なりし、生国常陸を跡にして、八重の汐路を打渡り、北亜米利加にて物学びし、十年の辛苦業成りし御国の為に飛行術、危険を冒して修業し、技倆絶倫の名も高く大志を抱いて帰りけり、此は大正二年、夏の初の頃かとよ、錦を飾る故郷の空すみ渡る、五月四日、

鴎は出て浪華潟、三つの浜邊は見おろしつゝ、早くも飛び来

想る天王寺、公園上は旋回つゝ、天辺高く舞ひつゝは、雁の燕の白

雲の中より聞ゆる拍手の音、遠雷の轟々たる如く、驟風落

紫は捲くに似て、桟敷壁えんもと為し、満都の士女は手を

拍してアレよ／＼と見てあれば、操縦自在に下り来り、偵兵

其の真中には、輪は輪をなしつゝ二十に、凜然たる雄姿勃かる誇ら

しゝ、大胆らしく細心なる、其風采の大なりしこと、主ずらし

倚子(イコ)に身をゆだねつゝ京(キヤウ)の群衆(グンジユ)をすてらむしと、ハンドルきりつゝゆく

轟音立つゝ、猛虎(マウコ)の叫(サケ)び、獅子(シシ)吼(ホユ)るの、耳(ミヽ)を聾(ツンザ)くとおもへば、砂塵(シヤヂン)を

蹴(ケ)立てゝ滑走(クワツソウ)し、天津乙女(アマツヲトメ)の舞(マ)ふ如(ゴト)く、羽衣(ハコロモ)ならぬ飛行機(ヒカウキ)は、中空

わく地上(チジヤウ)を離(ハナ)れつゝ、飄々(ヘウヘウ)として登仙(トウセン)し、一瞬(シユン)千里(リ)空(クウ)を行(ユ)く、群衆(グンシユウ)は

アツの感歎(カンタン)し、延(ノ)びあがりて見送(ミオク)るうちに、雲(クモ)や霞(カスミ)に隔(ヘダ)てられにし、

姿(スガタ)は見(ミ)えず成(ナ)りにけり、人(ヒト)のきつらを深草(フカウサ)の里、練兵場(レンペイチヤウ)の海外(ウナト)にて、

久邇宮殿下(クニノミヤデンカ)を始(ハジ)め奉(タテマツ)り、長岡第(ナガヲカダイ)十三師団長(シダンチヤウ)、其外将校(ソノホカシヤウカウ)など

忍ばず、君が香遠近の老若男女、君を訪ふ人の出盛りて、十重二十
重の人の山、かの才を一目見たさに集ひたる処、手並すがらも君は又、一筋に
吉川氏、目標として発進し、若葉の匂の里山、伏し富士の嶺、新しく
とうとう自然の白妙ゆかしき、旅上に於て行く手見渡して、八幡
山崎の淀、伏見、航程十五哩を、十五分に飛行して、姿は高く現れた、
スワ来たよと見てをるうち、角度を変へて行手を北へ、今ぞ着陸の
折しもあれ、発弁と飛びて墜落し、無残や君は今此に……、

三十年以一期として箕賀は置く露の身にして消へし果敢なきこと

あれば只消えかかるまでにぞ人皆後の世中に共同宗に今更

は君の寿ぞ没せんかく玉のやうなる三人もなしいふ〳〵の花壊

あらく今は昇富むかなってはこし新しと世に傳はれば知る

知らるゝ談ありて、木村俊田の二絶対ふ、讀んで君の心不盡を覺す

惜まぬものぞなき。せめてはかゝる君の名は雲井の上に聞し

召しかども畏こみて、語あり。日比まさに叙す御心深くて

久邇宮は、殊更いとゞ情をそへたまひし、生前の約束、かすみがせきしも、彼の飛行機を白鳩と命名ありしぞあがめまつりし。壮図一たび蹶くも、白鳩の名は千代の世に、其のいさをしと止むべく、天晴栄ある最期かな。其れ智者は惑はず、勇の者は懼れずとかや。犠牲と爲りし人々の遺志をば継ぎて勇みたち、皇御国に盡すこそ、是すなはち我らの誉なりけれ。

噫伊藤公

守田櫻外先生作歌

桐の一葉の散るまゝに、秋風一時に野を染めて、千草百草地に伏せば、悲風蕭條を吹きすさび、秋は何處の果までも、悲音悲鳴を傳ふなる、此處は何處ぞ滿洲の、北のはてなる哈爾賓府、重き帝の大命を、いとも畏み畏みて、時は己酉の神無月、下旬の二十六日に、公爵伊藤博文は、隨員あまた從へて、

停車場のうゑし圍にすゑ、皆此地の人々は、眞心盡し空へ
向ひし、空ゆは亂る旗の色、一齊に轟し樂の聲、
歡呼湧き立つ其が中お、打ちほゝ笑みつ老公は、露
國兵士の列前お、物靜かにめぐし行けるに、咄、何ぞあれ
兇漢ぞ、爆然一聲拳銃の、彈は狙いお誤すたず、我
老公お射けり。儒子何すぞかし老公が、覗む間もあ
らばこそ、再び三度彈丸は、僵え給ひ樂にする、

鷲啖、大事だから人々は、恩義を忘れさせらるの、懐恋年
当施弊じ、あて無しなる命なるかい、英濠水く満洲へ、室
のはてしなかりけるは、誠て帰らぬ事ながらし、昔に偲ばるる嘆
きみがための土、」行に臨みてし老朽が、人に語りて吾がつか、長白山
の昔話に、骨を埋んずと言ひきかし、言葉はしなかし、感を
ありしいに、なかし一の漢さかなるさんとは、誰かは想い到るべき、あなたは
単身戦は、為ばかり散りしの精花のみが、運命は同じ人の身の、ある

今見し聞きし夢なれや、悲歡一度來りて、上下貴賤の別なく、老幼貧富の隔てなし、嘆かぬものはなかりけり、わけても

畏き大君は、亡き公爵を惜ませて、國を守りし一本柱、世に頼もしき忠臣ぞと、尊み給ひ厳かに、國葬の禮をば命ぜらる」

茲に老公の白吟は記さんに、

蹇々王臣去復還、丹攀雲路謁天顔、

東瀛幾破風波険、白髪尚侵寒暑艱

出統ニ隣邦ニ扶植政ニ、入参ニ軍國ニ輔匡班ヘ、
君恩未報傷ニ裏抒ニ、煙霧迷濛海上山、
かく忠誠の臣なりせば、主宰に尽し五十年、嘗つし私楽お
も顧ざりき。あゝ老齢七十の、老躯以て国
民の、犠牲にさゝげし老公が、碧血残る哈爾賓府、國
蕭條かし同時まじも、君が最後お語りなん、君が
最後お語りなん。

別れ盃

利刀は踏に難からず、鼎あらば煎らるべし、君が為には、
臣死すと、堅き誓ひ固めしけさ、茲に赤穂の浪
士赤垣源蔵重賢は、設主が臨終の御世と念ひ、深くも
胸に刻みつけ、仇が窺ふ此二タ年、枕も砕く謀策、
御志の魂乱れねど、乱に給る酒を呼び、世を計つらば
知らずして、見下げ果たる心根と、爪弾して嘲けりぬ、人が知

ふじもなき山桜は、峰の嵐に散りぬ。清き武士の潔さや。腰

に入る濁に、一点の曇りもあらぬ大丈夫が、真面目に返す笑

ぢ、挙つた今宵子の剣は、頭領へくりで觸れさせられぬ。

今更なものら此日頃、慈父にひとしき情賜はりし兄

上へは諂へし、心の暇申さんと、饅頭竹皮に赤合羽、刀の欄

に結びなる。徳利も軽き出立姿や、重き大義を積る雪に、

袖うち払ひ、うち払ひ、雪の大路を千鳥足、途上の行人絡むで

白髪の翁白の髯巳やと蹣跚すれども本性を違はず行方
はや嵯峨の田の俤を草間の花と咲きし安否如何にと尋ぬる其の旧人
昔は壮年なりし諸々人に夜寒の伏して哀れに泣き侍ち
今は母の哭くといふ すべもなく事を思へども悲しき事なかりけり
昔くる嫗に心せ 如何にせんと溜めらふ心
奥の間に立、伯叔父目出度き雪
おぼつかなき近に通ひ涙して

内導(ウチミチビ)きのすゞしさは童髪(ワラハカミ)あり、小姑(コジウト)そのまゝ面影(オモカゲ)に兄(アニ)ならむ

ずゝ因鼻(オハナ)なかれ、〃〃〃〃〃〃何(カナ)〃〃代への膝元近(ヒザモトチカ)く見(ミ)〃寄(ヨ)せらるゝ顔(カホ)つく

だ〃〃と味(ウ)ち[illegible](ナガ)に〃〃〃デ変化〃〃想(オモ)ひすゞて落(オト)き一(ヒト)つ〃[illegible](ミツ)る、暗(サト)き[illegible]〃〃と足踏(アシブ)み伸(ノ)ばし〃、

〃すゝて〃〃〃〃〃〃〃牧(マキ)〃〃〃空漂(ソラ)〃〃(イビキ)紛(ム)れは[illegible](チ)〃〃吐(ハ)く思(オモ)ひ〃〃〃悪(アクラメ)〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃(イノスケ)

〃手近(テヂカ)の書物(ショモツ)積み重ね、差出(サシイダ)せしは曽我物語(ソガモノガタリ)、さしもおもしろき

草紙(サウシ)なるを、手(テ)にとりし同胞(ハラカラ)が、十八年(ネン)艱難(カンナン)辛苦今(イマ)ふ晴(ハラ)す

天津風(アマツカゼ)、孝(コウ)と勇(ユウ)との芳名(ハウメイ)は不二(フジ)の高嶺(タカネ)のそれよりも〃〃名(ナ)〃〃

りかゝり、苔むしたる、枕とす。木の体なりしと、柏し頂きて来て、おもて
つゞ眼なかりす衣衲、夾の堅波浄なりし小祠なる宮やあらむ
す欲び、椎めい其處へ、香水の酒、飲みて借りて容を正し、無念日頃
余が雲に譲り、存ぜず、岩の遊ずれず、殺して すなはち
情く浮にして何の無う、忘れて時の風の傷まし、今こゝ許の別
まい、松の実の花御しあひ、心の中にぞ思へり、眼か
書新きの乗数杯しお重ね、又傅し自から飲みし

其方は幼穉の時よりして、君に忠節又無不孝、殊に[illegible]其方は

常に学を好み、[illegible]の[illegible]、[illegible]又[illegible]

曽我兄弟の墓より、思ひ立ちて志すに、兄弟の思ひ出づる事ぞ、

[illegible]国[illegible]、[illegible]の[illegible]の[illegible]其方[illegible]

死すれば[illegible]、四条[illegible]の心根を[illegible]

すゝみては[illegible]の、[illegible]を[illegible]して[illegible]

はきよらに[illegible]、[illegible]、[illegible]

次の階段を今の千鈞の思ひにて、一歩一歩は退きて、艶能なく

後影、貴の御手を伸べ給ふが、別れ杖つきて思ひぞ見送る、

門は何と見えて、幾度か転ばんとして踏み止まる、

泣く泣く雪の林に消えてけるよし——

雪晴

薪に臥し膽を嘗めし、常なく苦みし、昔の嘲にたがはじ、

と今は月を見て思ひおこすらん、心に赤穂を立退きて、浅野の浪士は

四十七人、頭領内蔵助を始めとして、天地に誓ひ血を啜る、故主の
無念を晴らさんや、吉良上野介つけ狙ふ、心は元禄十五年、師走
其中の四日とぞて、恨みは深き雪の夜や、小歇もあらで降りしきるは
天の與へし一同が、勇み立ちぞ向ひへ参る、兼て調ひの火事装束
黒に山道かたどつたる杉、腹に携へ持つ裁着に、打者あり
草鞋踏固めん、鎖頭巾に備へ龍えし、鐘で床しき門の
再び逢ふ首途すれど、心に秘めらく除夜とらつ、鐘の合圖に打ち立ち

さくよ、雪に埋もれし大江戸の、大路小路小溝まで、下界を照す月光は、隅田の水に影凍る、川端町の宿漏ると、調子が舞ひ微かに、うらし、吉良屋敷へ殺到す、表門の大将は、頭領大石内蔵助が、其心の誠人を押寄せたに、忠臣一党の仇なれば、討入はさしも忠誠、然れども、吉良は臆病武士一人のみぞ、雑人は六十余人あり、敵に対せば名誉をもあげ、夜盗と思はせてぞ、火なき間もなく附けがきすくふ、心得たりと待ちぬなしく、門前にすいくとはひらひ、大音声

に非ざるやらん、さらば前の敵に在と、寺郭内近辺が永く見たらん求て

君の仇を報ぜん為、今宵植手等と、手はづを定めて一揆を構へ

合図なき程はなしたりとも、大鼓の音にて進み、揚矢をあぐるとも

くゆ、すこし要害堅固なり、表門も容易に打ち破らず、逸りて

逸る壮夫輩、雪崩の如く詰せ入り、討ちもらさじと裏門に向ふ

良植の一子宜親良実、年まだ若き三名の輩、花と追ひしき

大将の下知を待かねる手の者等、前後忘れて、先を

争ひ討ち入つて候。山鹿流の陣太鼓――一鼓三変の呼吸を忘れず――撃てとこそ存じ候方、夜討の敵募り持ち候、――寝耳に水の音

浪客は――すき討入ぞ味方討すな――上を下へと騒動し、周章狼狽――叶

くはあくと喚く声――敵つゞけど一番の鉢を知る――清水小林如水軒――

余人の者共は、刃をかへて斬を避で――寄ほ無益に強ひて奮せずして――

戦突戦闘力をきはめ、赤心こもれる刃の味、ゆるがず敵も得る

多くは算を乱して討死せり。今は手向ふ者もなく、目ざすは

上野介一人、心はあせれど氣はいらち、即休まずともと思へども、不思議や影だに認め得ず、天にかけるの翼あるか、地をくぐるの術あるか、取逃せしぞ無念なれ、辞天たる本命なる哉、二年に余る艱難は、唯一挙今宵に四位どのゝ首級、なすはらんとするまでなりし、我らとする止めたんに、拳を握り歯を噛みて、怨憤の目で道理なる。中にも氣早の短氣なる者は、地蹈と蹉して机をぬかし、己に斯くあらむ見えければ、良き位は斯様とおしとぎめ、聲をしのみて語る

やう、上野にた術あるとき、前後の門お取ふさげば、とても
逃ぐるの道あらじ、殊に褥の冷へざるは、此場去て程もなし、
我に思案の候あつて、枕に持ちし蝋燭の火お吹き消して
聲なのみ、闇に心お配りける、あらふしぎやな、壁の破
方にて、物氣配すぞくぶめし、一同はつと躍り立ち、鳶
然に監寄つて、畳とばずの室に踏破り、勢ひさんで混入
けるに、中に本綸子の白重ね、六十路に余る老体が、物にお

ざれる風情ども、片隅にくゝくまりしど、「啻人ならぬ氣高さして」

眞額かましき古[illegible]は、其[illegible]が恨みからために、怨敵上野に極はまる

ゆゑに、「盗の者は[illegible]し、遺恨[illegible]かまへしいづれ、良雄

徐ろに[illegible]へ、仇敵まさしく上野なれども、四位少將に[illegible]

[illegible]のさたならずし無用なれど、廣間に[illegible]兩手をつく「て暴君の

血汐に染めし、かれこれの多年の[illegible]かうしおきくて、早く御運命の極まる所

[illegible]御自害のまへし、[illegible]首なくばすまぬしと、幾[illegible]となる

すゝめしに、卑怯未練の上野は、死期に及び女々しくも、助命を乞ひけれ
[illegible]隙を[illegible]逃げんとす、[illegible]の[illegible]に
[illegible]年月[illegible]許さず[illegible]早く、胸元深く
刺し通し、[illegible]一太刀に[illegible]思ひを晴らす東雲や、[illegible]
渡す[illegible]朝影[illegible]に[illegible]高輪なる泉岳
寺[illegible]四十七基の墳、[illegible]忠臣義烈の芳名は千載[illegible]
[illegible]

城山

勝海舟大人作歌

夫れ、達人は大観す、抜山蓋世の勇あるも、栄枯は夢か幻か、
大隅山に狩倉し、真如の月の影清く、無念無想を観ず
らん、何を怒るや怒猪の、俄に激する数千騎、[illegible]
[illegible]の、[illegible]の[illegible]に、[illegible]すぐ[illegible]ともなし、[illegible]
[illegible]を捨てゝ、若どの原を殺いまゝ、明治十年の秋の末、
諸手の軍うち破れ、討たれつやがて散る[illegible]の[illegible]の人となり、

乃、血潮ほとばしる激しかれ、薩摩武士の雄叫びに、ちからこめ

は鍛冶屋もろとも、あとへひくものぞ、激しくなれば面をむけて、かへさで、味

追ひに退音くとこの聲、百雷一時に落つるが如き、あとはさながら[illegible]

盛りたつをはねのけ、幾多のあまたの人の、其の年に[illegible]

我、汝の力[illegible]心に[illegible]せし、いざ諸共に塵

訓せよ、説き生れんは[illegible]、人言[illegible]、桐[illegible]

かくとき、其昔の[illegible]諸共に、煙と消ゆる大丈夫、心の[illegible]

勇(イサ)ましき、官軍(クワングン)十重二十重に囲みて、昨日(キノフ)は陸軍大将(リクグンタイジヤウ)と仰(アフ)がれし

君(キミ)の寵遇(チヨウグウ)世(ヨ)の覚(オボ)えも絶(タ)えていかなる英雄(エイユウ)も、今日(ケフ)はあへなく岩(イハ)

崎(サキ)の山下(ヤマシタ)露(ツユ)と消え果(ハ)てゝ、浮(ウ)き河(カハ)竹の世(ヨ)の中(ナカ)の、無常(ムジヤウ)を深(フカ)く

感(カン)ずらん、無量(ムリヤウ)の思(オモ)ひ胸(ムネ)に満(ミ)ち、ならび霊前(レヤウゼン)へと隊伍(タイゴ)とゝのへ、目(メ)

[illegible]、折(オリ)しもあれや吹(フ)き下(オロ)す、城山(シロヤマ)松(マツ)の夕嵐(ユウアラシ)、

岩間(イハマ)にむせぶ谷水(タニミヅ)の、無常(ムジヤウ)の声(コエ)も何(ナニ)となく、悲鳴(ヒメイ)するかと

聞(キ)こえけれ、鎧(ヨロヒ)の袖(ソデ)を濡らしつゝ

常陸丸

池辺義象大人作歌

ギ　中　征路の戦やうやくに、進みて南山の、険阻も捨てゝ、兜の音

小調えし護衛が旅順の港も閉塞し、鷲の棲む満州も、君の

御稜威の旗風に、今は靡きぬ草もなき、さても筑紫の島はなれ

玄海灘の猶ゆかん、吹く秋風に日の丸の、旗ひるがへす常陸丸、佐渡

も渡りてすゝみ行く、船路はなほも白波の、よるべいかに遠からむ

何ぞ空しき空の、遙かに見ゆる黒煙、一筋に立ち昇る

わが手を空にす、敵の艦、もはや何事をか為すべき。一たび乱射乱撃の雨あ
らむ、進み退かんにも隙あらし。千里を走る猛獣も、水に入りては如何
にせん、万里の空を翔る大鵬も、翼折れなば、[illegible]羽は早
ずらし。運送船の悲しさは、進退谷まりて、詮方なく、敵
御艦の[illegible]せよとぞ思ひなし、「陸は如何にとながむれば、霧
にのぞまるの体なれども、翁が操る雲の末。輸送指揮官次君
中佐を[illegible]と思ひきや、大久保少佐の[illegible]すべからぬ小浪

聯旗おば手に奉じ、都の方を伏し拝み、火を放ちて焼き捨つる

み[illegible]後もしくしくふ、貴重の御旗を焼き捨てゝ、覚悟の程ぞいと殊勝

……まで、其の有様をつらつらみるに、中佐は軍刀を抜き放ち、無念の涙

……ゝとともに、自ら腹を[illegible]、万歳を唱へて悠々として腹かき切る

つゝや……ける、列へ並ぶ将校は……、下士兵卒に至るまで

同じ枕に伏すもあり、海に飛込み死するもあり、敵弾……、船は[illegible]

板上はなかなかに、屍の山を築きつゝ、流るゝ血潮は玄海の、波は赤く

戦を決する」

明治三十七年の水無月十日あまり五日の暮つかたのみ、夕日

は波に落ちかかれど、霧に覆くる海原より、いやみこむその中心」

聲一万千の聲細く、我忠勇なる将卒の、無限の恨みても、

潮の泡と消えてゆく」哀き激しき大きなる常陸丸」は一聯隊の陸の戦の

勇士、駒の蹄に満州を、踏みにじらんと夢みたる」ウラル、バイカ

ルまで攻め、いらましかとも幻の、かく時の間僅なる音え、

ふ断して、朝夕よ、鍛へし日本刀、水漬く屍と消えしかど

灘に殉せしめつ、ふれし情をこの名を萬代迄、御國の灘に
たつ浪の絶ゆる時なく仰ぐならん 末遠く流るゝ聲

白虎隊　　小田錦蛙夫人作歌

花は櫻木人は武士、散るべき時に散らざれば いかで人に
惜まるべき、茲に會津藩士の子弟まで 白虎隊と稱へしも
日新館の學生なる、撰抜したる人々で 年齢僅かに十五六、十七
歳なる少年なりぬ、忠勇義烈の少年者 學びの窓に筆をすて、

劍を噛て嘆へ声、潜む姿の健気なれども、三十七人團結し、首將の許
に驀付せねど、昇平時は咨嗟の、四方は敵の鎗と矢と、城内すべ
兵了て兵吾、鉾の陣衰へ老若の、似るはなかりけり籠りすみ
主君の安危を抱きの脊て、自ら首つかて發て ぬ、少年隊は勇み
壮なし、敵兆陰の左翼と占て、戸の口原に向ひ、群がる
敵を斬を入る、折しもすさまじき暴風雨に、倉高暗子修羅の場
雷鳴山岳を振動し、忽ち激しく電光に、小号早業武士彼

ゐるゝいらゑかんく影は白虎の如く、猛き上に猛き少年の息おもつか
す戦ひしも、ひとしく世に寡き敵を潮の如く、防ぐ味方は纔かに一隊
ふむ足らぬ兵は、傑よりも一方に散らして斃れゆく、生き残る者二十人
慶応戊辰八月、後の三日の凄まじき戦ひに、滝沢峠の険を越え
数ヶ所の疵迸る血潮を着の袖に拭ひつゝ、敗軍なれば兵糧
はこ一粒だにも喰ふを得ば、飢と疲れとに労れはてゝ、折れたる刀を
杖として飯盛山に攀ぢ登りて、鶴ヶ城を遥かに見渡せば、

黒煙天に漲ぎり、昨日に変る今日の状況、悽さなのみならずは
ゐる、遠君と別かれ、立待して、我が父母に今生の別れを告げんと絶きて、
目なのつ依し拝む、心なしちまなき哀れなる、時早く彼のとき
遅く、飯沼貞吉すでつひに、取出たる短冊は、母の賜ひし
和歌一首、此の世の別れに詠み上げてけり、篠田義三郎たちまち
天神辞世の正気の歌、声朗かに吟じてけり、敵は小なや吾
田和助は、篠田の声に莞爾と笑み、ゆきし最後の今様

故に「生きうてんかなぜんと宵らこの小」

人生自古誰無死　留取丹心照汗青

オン、さても忿じく天祥の零丁洋の一節よ、吟じ終へ一句は、小脇に
ぐると突き立て、汐の見事に引廻す、傍田はサ々ものみる中偽、試
水辺年に戦候を、察しとはちもと貫きぬ、さてもた株紅、永徹
雑陀の少年もて、重て安ら深すらず、冥土と共さと抱き合ひ戦や
一声剃髪が、永歎の突や法花のまけん、林を側め見之死て、名も誰おく

杯盤をとゝのへさせ、村駒四郎をして玉ならまくら酒かたーかう
孫しゝ遊ぎのかへるさとまよく、複搭かくて峯を幸ふ、その作ってきこと詠
後して行かれし岸は萋なる、嵯峨木の落ち散りくらふ、無常の風ふ
もちる搖せ、人を目覚しく消え失せ、秋の錦なく織る山よ、峯そくる位
繆たんとくかくに求まらん、あつもさこまかのき殊に解きて、戦後しなる少年の功をなし
捨ひ謀久来く、才人名士の相亡ひ、飯食出て絶望に、空く論
経は後の世の沮気を鼓舞せ、古くなって、詩もし殺なしーるさらかめーし

少年團結白虎隊　國步艱難戍堡塞　大軍突如風雨來
殺氣慘憺白日晦　鼙鼓喧闐震百雷　巨砲連發僵屍堆
殊死衝冒怒濤堅　縱横奮擊一再開　時不利兮戰且卻
身裹瘡痍口嚼藥　腹背皆敵將奈之　拔劍間行攀巖嶽
南望鶴城烟焰颺　痛哭呑涙且彷徨　社稷亡矣可以止
十有九人屠腹死　臍何戎事卅七年　畫之文士世間傳
忠烈赫々如前日　壓倒田横麾下賓

雲まよふなき月日は照らしも闇になん

さら〜〜川流れ行きは果つら〜き

げに渓山向かでも少年は 戦機と誠と決めの手に 空しく音に響かせん

逃せしと思ひし飯沼の 空の進や今だはつぞすけん 北ぐね冥し

哀れ人へ〜 為に一味の玉の緒諸共に はかなく留めつるを 海原は底深き

喫口の家〜の〜の〜に 時花咲きて ちらし細うた世の時 響かせなは、

天も人も皆 咲いて 半世不朽の白虎隊 名残しつぐは

あしひきの大和桜の花と散る、その眞心の紅を、紅葉はみはてぬ
若葉の年ぞと惜まぬ者こそなかりけれ、惜まぬ者こそなかりけれ

那須與市

四國八島の荒磯の濱で、源氏平家の戰に、源氏方に弓矢の譽、
今しも夕も近づきし、沖もしづかな平家方から、沖の小舟に扇を
的に立てたれば、義經公は御覧候ひて、數多の方を御前に召され、
如何に方々たれぞとみてや、平家が方の沖の舟の扇を的に立てすれば、

とふき備ふる彼の陣(マト)へ衝(ツキ)かかり、かすかすと玉(タマ)を[illegible]、討(オキ)ふ並(ナラ)ぶもの陣(マト)を立ちならば

誰(タレ)とも[illegible]者ども[illegible]、呼(ヨバ)はり[illegible]国中(クニ)[illegible]大将軍(ナスノヨイチムネタカ)[illegible]

[illegible]は、其頃(ソノコロ)[illegible]

[illegible]時めく身なれば、常に宮中(ミヤタカ)[illegible]、十九歳(サイ)。常(ツネ)に好(スク)みて華(ハナ)やかなる[illegible]

威(オドシ)の鎧(ヨロイ)着て、鍬形(クワガタ)打ちたる五枚甲(ゴマイカブト)の緒をしめ、白檀磨(ビャクダンミガキ)の臑当(スネアテ)

弓(ユミ)・矢、兵庫鎖(ヒョウゴグサリ)の小手(コテ)を差し、馬は五歳(ゴサイ)の黒毛(クロゲ)の名馬(メイバ)、梨子地(ナシジ)の

鞍(クラ)に三つ頭(ミツガシラ)手綱(タヅナ)、連銭(レンゼン)葦毛に打乗(ウチノ)り、二十四差(サ)したる切斑(キリフ)の征矢(ソヤ)

或貫は、その沙彌兌ら寒冷に散ら擬務は、呼しも叫ぶしつ、試く見へ上

け、願つ捧らつ祭の乗出し、神矢ら放ら、男宿せは、間合は出くとしかな

是えき、護摩壇の棚は諸ふかく、的は打ち放らす、射つて乗ら弓矢を

宿らせ、すなはち神を宿らせ、一言の御請を念じ上から、如何なして射る

ほーと、小松原に繋ぎ込む駒をならび打ちて、伊勢宮八幡は従ひ給ふの

御代の五十五連の命ならば、四十五連で、三十五連の命ならば、五十五連

五十五連の命なれ、四十五連の命を縮め、神は的を射させ給へと

謹んで祈誓申まつる。やゝあつて南無八幡宮と念じ、宗高が、二つとなき

命を射させて、祈らん其の不憫ぞと。やがては十二才の的を射つけて

ちと宗高どのの御宣託の通りにあれバ、宗高ハいよいよ勇みたち

海中へ散りて駆出入る。浮きつ沈みつ、一文字に黒き影さす。高師

逸物とは申しながら。遙かに渚を離れて、沖へ寄せて見えにける。

のくらは射られて、弓に矢つがひ、矢頃ほどよき

ならず扇の要目掛けて、一寸ばかり射切る。扇は空へ舞ひ上りて海中へ

かくと奢りければ、平家方は嘲りて、陸は源氏こそつよからめ、箙をたゝいて誇りける。されば、なほ平家方は敗軍を掃き集めて、西国さして落ち行く、そのころの平家の有様は哀れなりき。宗盛の外功臣も数多ありけれど、たゞ義経の功名は輝きて、名を末代に残し、遂に源氏の御代となりて、目出たき事よ。

皇太后陛下御製　金剛石

金剛石も磨かずば、珠の光は添はざらん、人も学びて後にこそ、

誠の徳は欺かれ、時計の針は絶間なく、週るが如く時の間も、日暮らし
惜みて励みなば、如何なる事業かならざらん、水は器に従ひて、方
円になるなり、人と交はる友により、善きにも悪しきにも移り
るなり、おのれにまさる友なれ、撰びもとめて諸共に、心の駒
に鞭うちて、学びの道に進むべし、

千代の春

かゝる目出度き御代なれば、国々所々に至る迄、千代の春を待

嗚呼此秋の楽しさよ、皆うち君の恵み深さを故ふとて、
一諸共に阿那奉る、想ひの儀もく五、寛なる遊べ舞
遵奉せね、高歌妓絃に調べつゝ、朝日の光月の影、
照る光の尊さも、唯ひとすぢに思ひまつりて、奏では金銀
賑合数しき、四方の国みも影し、太平を出入る人の轍を
道はうち絶えては、日は語名よ国つ八重衣、吉き都の都、
謹みの楽みもあらん、かほど治まる御代なれば雨風さわぐとも

枝鳴らさじと云へば又、人もしく君の此代を、千代萬代までと、
折らぬ者さへ惜かりけり「壽」

櫻狩　吉水経和先生作歌

霞棚引く山おろし、さそふ里の花さへ永むと、斷く駒子鞍は
その也、峰の雲近く、笠輝ふ陰れ、芝の庵をたどりしまゝ、塒寄せ
し、鶯の聲なつかしき春の野に、萌ゆる草葉の露分け
ぬ、すさむ駒のたてがみ、乱しつゝ、ひける青柳の、糸ぞ傳ふ

しら朝風の、吹くともなしに誘し来ぬ、遊ぶわが城崎に
かと「思ふ間もなく遠近の梢は雪の白雲より、」景色も妙なる
その様子、「浮世の善悪もしりつ忘るゝ、」暫し琴声ならぬ
ちゞみて、矢立の筆を取りもあへず」

薄命難伸洵自嘲　　納涼携手膈断花
零丁借宿年悠度　　吟詠恨風原義家
志賀浦気飛暖雪　　奈良都古芳香簇

南朝天子今何在、欲望宝山一路更険

みまつゞきたる水楼の、跡ふ跡もしくなりて、むすびし、風のはかなし」

さらへくれば、かつて南朝の昇すぎて、散りしく花は消えて畑に」

とじかふ帝の如くなりて、かつ夢の御はうつりて、夢のまにまの跡自

はかなくあはれしるその今も自は昇、みゆるかげもなく夕なりけるか、さりとて

嵯峨ともまつりはらし、今更ふりつゝ夕暮の、鐘の音すくみにけり

いみぞ、昔をかたりしぶ人もあらなき」すはもりをすみつらるの花の林ふり。

まつ来るまで春まゐるで頭あひ、まづしるしく人もいはるまでか、時々

とその大きりらんや、栄枯盛衰は世の習ひ、など生業も道理

故、などらぬ外ほかすすまゐかゝ、いざさらんと乗り駒の手

綱ひぐる袖の綱の、花の吹雪はかゝりけり、花の吹雪

はかゝりまゐらせ

春日　小督

春日野に、下弦の人の里若草の、峯の月明らけく、錦の衣霞、

渡れる片雲の月は、湖をりさゞ寄す常くし、此方の夜寒を天つ成る、
ホンとぼそ、彼ふ後に、深山が、常く久しく松竹み、落葉ふ
くろすらる、諸人、遊よ河の、漂の帰路、流るゝ月ふ、五百歳ろ、
齢保ゑに、ゆづる泥ふは、朝日かゞやく、寶の山彌、古けるを蓬莱
山をはりかいつゝ、此宝の名は、影を湖水に浸し、あつけ
梢を風に、月海上ふ浮むでは、兎も浪の上、緑樹
影しづむるは、魚木ふ登了風情うな。五風十雨のぞ代すずきし

四海に靡く勝軍、凱を奏する度ごとに、幾萬代迄も變らぬ御代こそ目出度けれ

臺灣入

西村天囚先生作歌

すめらぎの、御稜威は四方に輝きて、清國遂に和議を乞ひ、臺灣島は獻上し、合戰すでに治まりし、君への御代まで目出度けるに、臺灣島の土賊ども、龍車に向ふ蟷螂の、斧をふるふと聞えしかば、征討の御師をぞ遣はさる、近衛兵の精鋭が、

遂みて支信毎名ケ十一は、陸奥守内大臣、北白川の宮とて

金枝玉葉の末ヲ汲み玉ふ」三宮角の古社殿、宮家安泰のもと一顧

踏み一本妓消つきらぬ鼎沸ちして、炎熱やそら顔自ずから三百段

後の陰陽をなす、上下る宮中乎職を給ひ、次第に薄き時を儲け

ナゾの炎く儀帶けるて進せる、士卒はかの戦闘激し、病兵すらなき

生くあの真、命を惜まず進撃す」折々の宮なを龍なるたりき、戦

兵どもの耐樹乎難れは、雨の激しき士卒の、草のはらなさが如くなりて、

砲烟暗く天を掩ひ、百雷叫びて相応ふに似たり、宛は長蛇
を擁しつゝ、突貫せよとの下知する者ぞ、川村少将は島大佐と
力を合し、勇み立ちたる近衛兵、わっと叫ぶと進撃し、殲
の陣営に突きて入る、賊兵は其気を奪はれ、狼狽潰走に
逃げ散りし、降参するものゝ数知れず、大砲小銃の戦利品、
其外器械のものまで、勝鬨渡しとあげざまに、宮は此
時始めて、基隆城に入らせ給ふ、斯くて去六月十日には、台北城

我邦に入て　七月漸漸かに暑を増し　熱さる八月には、濛然たる白濁る
西府なは寒え、十月の初めつ方　台南措して　お進まる、決
暑すくて、寒寒多く　地陰しらして　糧道絶えん、乎等苦
のその中に一年　室は窒塞と食で貧る、貧は牛馬に鞭をあげ
夜は三流程不断に露営して　戦衣の袖に月を宿し　たゞ寒さう
なる兵のたゞ　家族の写を　とどめてくし　給ふ、苦痛はいや
な悲しや、ここ　外の国住のす見すてず　すくなす　艱苦か積やゑそ

らせ給ふ、遠くは大和に擢らせ給ふ。日々に進らせ給ふ小松も、御供
の人々より驚き、都をさへ入らせ給ふ。揚柳物心(?)はあへ申さぬと
むかしはいつかなきさらしるべず、わさ官軍の将として、蹴
平安城を見ぬらしきは、殊に内裏の跡と見ゆればとて、わさの
みな遷都をぞしたまひて、御輿を都へ入らせまゐらす、籠をも留めまゐらせ
遂まいらせはじめより後、その後済、賊徒平安城と申すべしと、
遠は出来國とうしから攻み給ひ、勝軍とたゞ一聲す、叫び給ひし

斗ますつて、戦なき天にむずらせ給ふ、陛下謂く、日本武尊の～かるせつと成、今目の前に見参らせて、國中の民も兵も、動揺せぬは皆の付なり、若から酒自今日とは、思はねど、楽しかり不孝に遺骸ありし、ただ人は、名を残し、骨を残さ人は、名をと千歳に浮せのしい、

皓然遊々仁政城
想見将彼台南地

皇謨剣沈衛歓声
讖破巨魁安万世

と、宮の詠ひ給ひし歌も、戦功偉烈後の世まで、讃ふる称し

あるまじけれ、犀川の水は逝きて返らねど、月影清く澄

み渡る夜、英は御代に流るらん、英は御代に流るらん歟——

河中島　吉水経和先生作歌

天文二十三年、秋の半の頃とよ、上杉謙信は、八千余騎と

従へて、河中島に討て出づ、此方の戦は、武田信玄が

鳴り語らて、親しく雌雄を決せんず、渦巻く千曲の一手犀川方

彼等は猶ほ疑ふて来る。信玄は日暮に聞き得て二万餘騎をひきゐて向ひ、備をうかゞふて戦はず。謙信は気をいらち、村上義清に言ひ合せ、月影暗き山々の、草葉の露を分けて、彼方此方に兵を伏せ、棋に擬せし兵を出して甲斐の兵営に近づかんとすれば甲斐の兵、謀とは露知らず、朝霧の間に追ひまくる。待ち設けたる伏兵、時こそ来れりと鯨波をどつとあげて引きつゝみ、袋の物をとる如く、一騎も残さず打取りける。

信玄怒って軍勢を、雲霞の如くに繰り出せば、謙信も備を立て
てうち向ふ。龍など雲を起し、虎うそぶいて風を生ずる勢
破竹の如くに入乱れ、攻つ戦ふ有様は、颶風砂を巻き
百雷岩をめぐるも異ならず。越後の勢退けば甲斐の軍すゝみて追
ひ、甲斐の軍退けば越後の勢すゝみて追ふ。兵を合すること十
七度、いづれも勝負なかりしが、一ひくとも見えし信玄が、一と年の
勢の旗を伏せ、何れも後へくいしつゝ、裾を臀にはしよらせ、

山網子

勇み立たる謙信の、麾下近くすゝみて、一面も振らず切て入れば、麾本の軍勢は、思はぬ勢に破られて、走る跡より、金田飛騨の兵と、鬨を作つて追ひ来る、宇佐美定行すかさず遮りて、猛虎の如くに憤り立ち、奔馬を驅て、大音に喚きて、旗本の勢に下知なし、敵の横合より、無二無三に突入て、劍戟をも言はず、追落させ、信玄度を失ひて、流れ乱して、走る跡を、謙信只一騎、赤栗毛の逞ましきに、小鞭をうつて、豎子何処まで逃るぞと、云ひも果さず切掛つくる

信玄は刀を抜くに暇なく、軍配扇にて受けられど、扇は二つに
斬られけり。
降りしきる雪を蹴散らして、河中島の夕霧の
如く二の太刀は、早肩先を打込みぬ、いつしか何間に
信玄の、命は岩に砕かれし、波と消えなむ身なりしが、救はん
と軍兵の方々は矢を討ちかけ、氷蹴立てて追ひ散らす、
大将原大隅、鑓をのばして謙信が、突かんとしたる鑓先の

斯くてはならじと鎗をあげ、たゞ一打と討ちかゝる、馬はいなゝきて
馬逸す、謙信は駒ひらりかへると、手綱のひくその隙に信
玄は、虎口を遁がれさりにけり、

鞭聲肅々夜過河　曉見千兵擁大牙
遺恨十年磨一劍　流星光底逸長蛇

もろく信玄は、ましおとらしたる謙信の、心の中は如何ならむ、
思ひやるだに哀れなり、信玄は、肩の痛手にたえかね、その

暁のこゑに厳誓は、まよひて出る月影の、道を求てはまよひしを、
わかりかさとみちのへまけるも、我故郷みちのへ至る来

石童丸

四室遍納治大人作歌

月に村雲花に風、心のまゝにならぬ世を、浮世とする今習ひ
ここに筑前筑後肥前肥後、大隅薩摩の守護職に
加藤重氏其人も、無常を感じ世を捨て、諸国修行に出で
給ふ。跡に残りし妻や子は、思ひ侍つゝも拾四年、父上高野に

去るとても石童丸は母上に、菅の小笠を被せまゐらせ、継の笈を負ひまゐらせ

歎いすく、嶮く高野の学文路宿、明日は逢はんと寝ずも、女人

禁制の山なれば、登りえずして海路、麓にありてそのにせし宿

童丸はたゞひとり立、母かくく胸道わけすぎのぼり、峰の薬師や瀧不動

手を合せ伏し拝み、さしかゝれば母の奥の夜は

十ゐく假寝して、笠の屏風に添寝して、諸行無常を告げ渡る

鐘の音けとどき来み〳〵、九百九十の寺々や、峰々谷々の阿弥陀仏、

菩薩お念じゑづぬれど、父ぞと想ふ人もなく、二日二夜は早

過ぎぬ、麓の母な安ずらんば、後ろにもどる心地して、松吹く風

捨て〻今し、母の聲のとうたのらみて

ほろ〳〵と鳴く山鳥の聲すれば、父かとぞ想ふ母かとぞ想ふ

と、行基菩薩の詠まれたる、歌のこゝろも想はれて、歩むとも

歩みつゝ、無名の橋を越え行けば、左に花扱谷の数珠、光明真言

となへつゝ、刈萱道心下り坂、見上げ見おろす顔と顔、石童丸

よ源血と高祖の血とをつなぎあひ、囃子がなすみ人あるは、隙か
まへみしはうるならずし」その時石童丸、独りこそ追ひ来て、いのちは番ひし
はなれて、今道心と名よ、教へてかくと語る様流の、見ればいとるのの
幼子が、懐ふすなるかく脇差は、見覚えのある品のしか、花の顔を
月の眉、何処か母に似ているならば、いふも不思議よ然えねども
じつと耐へ忍びて云へるかし」尋ねる人の名を書きて、札場にかかれど
逢ふまでも、はるきをとめし石童が、途方にくれし形勢の哀

と思ひ拜み取て、松のが住家に伴ひかへ玉ふ　國は何處名は何と

問はせ給へば涙ぐみ、國は筑紫の松浦潟、加藤左衛門重氏が忘

れし形見の石童と、聞くより刈萱胸せまり玉ひ、落つる涙をとゞめ

得ず、石童をさして悟り玉ひも、若し父上にましまさば、あのしく

などて前へ寄玉ひ、しづしづと回玉刈萱の、数のかずや込み懇に、

情はする、時の石童が、あら可懐しわが子だと、言はんとせしが名

乗玉はね、その刈萱は去年の秋、空しくなりぬと答へば、石

童ちと離没しく、生きし人とも見えざるが、苅萱ちでみ懺悔し
て、墓場みに連れ行き指をさして、すてこそ父の墓なれと、教へ給
へば石童は、力なく——跪す、涙ふぬ手し袖涙、絞もうちへき」
愛み深き——雪しろ白き手を合せ、南無阿彌陀佛——と伏し
拜む、姿を見ても、苅萱は、胸も張り裂くばかりなれど「抱きやに
母する修行なれ、生者必滅會者定離、本来空の理ぞ、悟
互るのしても恩愛の、またかはるる者すらかか、」墓場に倒れし

居蘆本、雅守護して除くみ候、神力なくんするらず」四つる和つて母
於て、甘田定なつて固居せらるゝと、すゝてみるらんば居蘆は攣らせ山へ
「歸らは」、母に告げんと探て見せば、或年くちる精魚上は、居蘆
流れ待ちる事し、林房の館辺に摺鉢る」、寡エぬ遊びを積み合
「一時を」ふ、あの父よ生別さ、或母よ死別き、渋ても我も地てし思ひとる」
なとくる夏とするは姉君の立て達て甘田ほらもとしるのまて見ん居姉
まなた、甘母が喜びて候きもし」すらしも猥みく浮世さのる、実母

ゆく夜半に霜冴えて、磯山路は音もなく、千鳥しば鳴く松浦潟・浪に漂ふ捨小舟、世に人もなき石童は、高野に在まし其時に離れ給ひし御僧の、外みは父はありしと名乗らず、再び尋ねては御弟子すと、請はれて苅萱道心もなく、打連れて国々なる修行あらしら、信濃なる、国に住処を定へさせ、師弟と名乗るばかりて、親子地蔵と唱へること、遺言し給ふ哀さよ」信濃に名高き善光寺に、石童寺の本尊よ、親子地蔵の在す

有乎、親子の縁はかく迄も断つても断きぬものなる哉。今は昔の物語草。今や大慾の地獄沈淪。今や大慾の地獄沈淪

別れの国歌

小田光岩大人作歌

共に眺めし月影も、今は屍の上照る。光も何時の浮雲

隔てられたる野も山も、風蕭々とすさまじく。新戦場は

おぼろ夜の、春とはいへど猶寒し。此所は戦後お報天府恩

賜の繃帯しるさすとも。あやにうしまつ皇国を守る名誉の真

傷兵幾千百の多き中に、悲壮惨憺なる状は、野戦病院の許
術者縦令鮮血淋漓とほとばしるも、骨は砕け肉は破れ見るに堪えざる
重傷の一兵卒は横たはる、痩躯鉄を構ふる者の糸よりも細き者
哉、嘆じて曰く吾は死なんと、軍医は直に懇に慰問して手当なし
施すとて苦痛は如何にも堪へ得るか、言ふことはあらずや、優し
其言に答へて甘んずと、苦悩を閉ぢし目を開き、微笑みて
悲しげに、早く癒えて再び戦場に立たんことを答ふる

滑進ちて」巣窟はりめぐらし道場なれ、魔障利はなむちらす、塵
空地すそく旋すれ、四つ二つの数となり、命ぜられれば時のぼりし、三つ
ど激くて傍ーはげ、夢まぼろしーのごとくなる」一時すずし葉もふ
隠小・巣窟は小の蘭出し、咲る則涅槃の断にし、咲きの開節の寂
開花、行きへとする一刹那、呼吸も徂えて」楽の一々も見
えずれば、巣窟はかの枝も捨て、跡すと既に終はる事、目なみだか
らも見えもせず、手術台上の花と散る、大和武雄は夢なのか、陛

下の萬歳唱へつゝ、歌ふが如くかなづるが如く
君が代は千代に八千代にさゞれ石の、巖となりて苔のむすまで
と此世の別れ惜み君が代を、奏ずる聲もたえ〴〵——に、或はたかく
又低く、苔のむすまでの七文字は了らぬに、奏し終らば忠魂は、天の一方
に飛び去る、残るは名のみなりし、すべて此兵士は福知山、聯
隊よりの出征にて、姓は杉山名は藤吉、まかくの外に餘念な
きゝれとなるまで香ばしき、最後を此處に遂げにけり、泪あ

るもの忌むな、鷲のすみかし奉天も、国に殉ぜし大丈夫が、霊
にこそ入しかの大まもろ、尾羽ふりてし、ものたちも抜く

橘大隊長　吉留経和大人作歌

奥大将の許にある　大島混成隊の関谷聯隊は、首山堡の激戦に、
橘大隊長を失ひし　その大略を奏でへに、聞く者誰か泣かざる
らむ遼陽の月も、明治三十七年八月晦日を堺にて、石原戦隊と
先として、遼陽の堅塁を、おかし…揃ひて鬨の声かまへ、損害

の多くしく、終日苦戦が為にきせしは、大島将軍は流弾に傷つくの、
関谷聯隊長が殊更に、先登部隊を率ゐ給ひ、橘大隊長は先ん
陣に立てすゝめば道すがら、風蕭々として腥く、月朦朧として
て水眠る、渓は血潮となりにけり、頃しも大隊長は号令を下すや
兵皆勇み立ちつゝ、獅子奮迅の鯨波の声、天地も震はさん
勢ひ立たりき、断崖絶壁攀ぢ登り、穿ちたる二條の濠
我猶とし残兵は、勇気凛然として打出す、鬼神も拉ぐ我兵と

も、苦戰に苦戰を重ねては、功少くして害多く、」橘大隊長は牙を嚙み、阿修羅王の荒るゝが如く、大和魂を振起し憤のありつたけを打ち込み、大喝一聲と叱して、群がる敵を咬合、」蜿蜒かなわず十文字、八花形といふまゝに、露は苅菰と斬て捨つゝふるふる勇猛の振舞に、部下の將卒感激し、大隊長に續きすなと、異口同音に呼ばゝて、さしも堅固の敵壘も、忽ち攻落して日の丸旗、壘上高く飜へり、萬歳の聲やまず

王き」敵は無念に堪へかねて、再びさいに押寄し、棄波が作りつて三方より攻、ひとゞ烈しく砲火すれば、消ずかくれば募りしき、花翁の大隊長、左もなく肩先の傷ひなく、深手は年古負ひたれど、従容自若神の如く」自ら旅にて携帯し、四斗なる見下す絶頂つよ、動きもせずに直立し、敵情具さに見をまるに肉田軍書年びの千吊て、大隊長どの危険有之」遺憾ながら此場合」一時退却なきにさば、大隊総て全滅せむ」、大隊長

はた時よ。ゆるやかなば動く〳〵、侯が胸へ勲章を撫で、部
下のうくまで倒るゝ哉。見ては将の身は斜ならず、併し軍書考
へと、今日は八月三十日まで、忽ち多くも畏くも、東宮殿下のは
謹佳日曰く、斯く有る貴き日本國王、部下の之れ乃ち一哉ならなし
先て、嘆く須くら、敵塁なく、見ずるへ彼が為へは、といへずし
も、無念有旦、許せ軍書寫くとも、今上陛下の貴為めと締
の至陸軍の矛その為めと、哉と枕が並べつ、共み戦死を〳〵偲

そこで、今次戦闘に於て軍曹は、只感涙に咽ぶのであつた。

時に敵弾とび来る中、大隊長は深傷を負ひ、再び負へば危険を、

激しく勇ましい戦ひの最中に、どうと音して倒れた、内田軍曹だ

どうです、大隊長、大隊長との声、呼べど叫べど、空を横切る砲弾

の御遺言の外には[illegible]、あれ程までつくし見廻せど、大隊長の姿

は見えず一[illegible]、夜と親しみ夜は[illegible]、陛下の御為、お国の為、潔く果

敵を前に[illegible]、戦友として軍曹は、大隊長の肩に[illegible]

韋駄天走りに夜道すがら、すがらの波の如くに駆下って小松原へ出で

し時に、二人諸共寂寞に音と絶えもならぬのせい、勇び出にま

忍び寄る、漸くおくまでほの〳〵と明け行く空に秋風は、身に

しみ渡る無常の音は、いとゞ哀れを添ふる時、大内戦の聲

みご二人共、目を見開けば、軍書は、おのが深手はもうよる忘れ、讃

心付きて呼び起し、大隊長との訣別しば、雄叫と気付けば時た

みらんかくて、呼ばれてみらし大隊長、両眼くわつと見開きて、吾は此

併捨、並多く、直多くの部下を殺せしは、天皇陛下に対し奉りても、我国人としては、相すまぬし、わが身の屍は申すもさらなり、魂すでにとぶまで見て、砦は又堅く守られてしに、かすのの声力あくまで、内田軍曹すらかりは、われと共に泣伏して、憤りし言葉にも出でざりけり。斯くてあるべきにあらざれば、再び大隊長が許に赴き、ひ、余の人とすれば力なく、足はすべって打倒さる、又起きあがれば又倒る、心は千々にはやれども、胸の深手を如何にせむ、まさらくる大隊長は、寵愛したりし従卒の伊藤金治郎に命ずらく、此曉がたく小

明皓たり、虚ろ後の銃声の、絶ゆる城砦は勝利する迄、嶮しき嶌は浮標
そ、戦は追撃に移るべし、暫し銃声絶えたれど、戦ひ半ばの時ならざるぞ
汝らよく心得て、わが身の銃を持ち帰れと、いひつたへらで殿が、戦況
如何にと講ずるに、山も山間の城砦の、声は頻りに聞ゆれど、銃声絶えて
絶えずなる、兵を読むも、ミオホ帯ず、散せ付けずして見れば如何に、伏
隊長は軍曹目の、背は負ふて林濤なる、血潮に染みぬの冠なりぬ、
因りは後の事に砕、一手之を加へ付けて、大隊長は我が背に、移りし

かへる中空(ナカゾラ)をも一味方(ミカタ)の陣(ヂン)におちてつゝ見するなり　あゝ尊く東宮殿下(トウグウデンカ)の御側(オンソバ)に、仕(ツカ)へまつりし勇将(ユウシヤウ)は、数ヶ所(スヽヨ)の疵(キヅ)に猶のこく　首山堡頭(シユザンボトウ)の朝露(アサツユ)と、消(キ)えはてつれど橘(タチバナ)の、香(カ)は長(ナガ)く遼陽(リヤウヤウ)の、空(ソラ)すみ高(タカ)く匂(ニホ)ふなる　空(ソラ)至らぬ隈(クマ)なく匂(ニホ)ふなりけり

廣瀬中佐　井上秋剣大人作歌

一言(ヒトコト)は、是一生(イ)この人ありて得(エ)ずなば　腹(ハラ)も心(ココロ)もすゞしからんや　最後(サイゴ)の詞
あゝ骨(コツ)は焼野ヶ原(ヤケノガハラ)に空(ムナ)しく忠義(チユウギ)の魂(タマ)となりにし　松陰(シヤウイン)の神霊(シンレイ)の今(イマ)もなほます

又とあるまじき[illegible]禅、はかなき人は時は去らざりの、堂々上げたる[illegible]
の雲、降る弾[illegible]の[illegible]の、征露の事挙しけるも、武士の誉[illegible]
[illegible]栄、保つるこの靖国の花と散りし、霞と消えし大丈夫の、
名だたる中に朝日丸の、廣瀬中佐の、[illegible]は、[illegible]くぞ[illegible]
去ぬるは三月二十七日、港口閉塞の任務を帯び、福井丸を
迎撃を[illegible]し、向ふはいづこ、旅順口、百の雷矢そゝぐなる
弾と降る中を、ものともせず、決死の命

玉ノ緒の絶ゆともやすし敷島の
大和をの子はつとめ人たくましく

と詠みたる歌は身のあたるまゝ、捨つる武士の屍なく、うかべる詞と覚悟して、心ずしたる港口に、我とわが艇沈めつゝ、任務は終へぬ、いざさらば、ボートおろせの命令に、兵士ひとしく乗移る中彼し乗らんと走りよるが、見れば一人不足なるまゝ、兵士一人の玉の緒を、国の宝とうけたるまゝ、部下なればはぐくむ仁愛の、情の声

呼べどゆくへはなかりけ
数ふるびし中、杉野兵曹長はあらざるか、
又、杉野兵曹長はあらざるかと呼ぶこと三度に及べども答ふる
ものは荒浪のみ、早くもデッキおかくすまで船や次第に沈み行く、
ボートまでたどるると飛びのりつる、刹那に敵弾とび来りて、中佐の顔へ
上に破裂して、鳴呼廣瀬武夫、壮夫の体わづか一片の肉塊を残し、
流れみだへとてあまりにけり、落花のみだらんとなりにけり
一世の義烈赤穂の里　三代忠勇楠子の門

憂憤投身薩摩海　慷慨就刑小塚原

君の作りし詩歌の　正気の歌の一節は　古人に恥ぢぬ真心を　洪[illegible]

まで発揚[illegible]一、花は桜木武士は　後の鏡となる身の　香を

とどろに残すらむ　香もとどろに残すらむ――

毒饅頭　木村大人作歌

笑へば子女も懐かしみ　怒らば虎も恐れしむ　英邁偉絶

の直系傑も　まのあたり見しは稀なれ　[illegible]

知遇の恩に浴すてふ。四百余州を我朝の、帝に献ぜむと偽り
み夢醒めてはあだなる夢なりし(?)。凛き大宮居なりし、吾
翻の居はいと安かりし。宿因に西の仏人等、必ずやとおもひやまん
ん。仏陀は渇仰する者を依し、捨てゝ得安かる時や来む。されど
仁義の輝きも叶はず、心の誇をも引き去らず、さればこそ幼君も
すくはず。心は二つに分れ、一つ、流石鬼神の情にも困じ果
てぞ居たりける。また星霜に京都なる二條の城に幼君が、

跡をたづね参らす貞清に、御供なし、清正に、豊国神社の御供物と、いつはりて持参す毒饅頭、毒とは知れど遠慮の孝行の姿の渋川を、せめてもとは知らずおのれ先、毒見役なしてす、よんで、その真心を以てのみうけ、一つなくまで味はへば、身体日々に衰弱し、とうとう余命は永からじ、命あるうちに今一ど、最後の御目見賜りて、帰国の御暇願はんと、片桐市之正且元と、共に出仕なしたまふ。此時幼君の秀頼公、今

年齢は七十に及び、寝屋附添ましまして、太閤どのはのみまし。後世黒白
ある後は、頼み勘なかりしをもつて、謀叛あなはす一日家康の、蔵
ふ想ふるのおとぞあり、なにくその外、外に望みのほつてのと、恨さ
みで一言も、仕舞然して申すやら、朝鮮まで是迄おばつと
どうかしたる大きる果て、いつの身の氾を出すべき。あつまた外より
望みも来ず身体、家康公を申奉るは、仁義ふもかる大将。
無道のわざとはならず、よくまんしく、千本一つもみうずみるゆゑに、大坂生の

鐵壁に、おとらぬ手らじの奥義ある事、老はしらねど、甚だ他事に
見過し申すんや、文人墨客に縁ありて、紋付文房ふかけらるらし。
は心体を申すんと、いと頼もしき言上に、掃帚の敷許す手にて、
別に身は富貴不如帰と共に、此高聲公卿に鳴るも、我が才の上を持つ、
迄え、心に思ひあはすらめど、秀頼公にもうち向ひ、清正の奈
すのなれば、我が君父の諫言故、心寛くも容されて、徳川
どのもと父君と、仰せ給ひて寛栄に、必ず許すまじつや給ふななどと、

いと悲くて枕上さらば」秀頼公はきこしめし、爺の言葉は守れども、病のためゑに帰国せず、最早かへは叶らぬか」病つのらば自らが一人、看取もなくして遺はずん、我にまつまのあるならば、又は呼びかへせよまつと御せありける」鬼神をあざむく清正も、御側に侍ふ国元も、聞居給ひし淀君も、胸も張裂く思ひすて皆「一同に俯しぬ」果しなければ、清正は心を鬼と取直し、ち大暇申して出ければ、秀頼公は立たせられ、爺よ――」と跡に

追ひ油をそゝぐ泣給ふ一猛虎が嘯く清正が拗ねたる身の

悲涼は、引きかへて元の座ふきの人々」秀頼公が徳川常つく

ゞ——顔が恩上げら、賀しく申す秀頼、夫れ見兼ね

清正の、断腸んすったり涙ぐみ、惜しみかねまいらせ——さ、

やがて不時の中途が、我の不審を書道ほどまで、下したまへば

清正は、書を得ず筆、状し詳せ。あらゆる委細をほどまで、

寡ひ給ふも清正が、無二の心の誠を表し語らはせん待ちかねる

——○——

ますこと、君に仕ふる人臣は、かくあるまじきものと思ひたまへ、かくあるまじきことの思ひたまへ。

本能寺

小田錦蛙先人作歌

麻と乱れし戦国は、人とし言へば誰もみな、馬を駆り兵を養ひ権を奪はんと剣を磨す、頃は天正十年夏五月、徳川家康封ぜられ、安土城下に入りしかば、織田右大将信長は、いと鄭重に迎へんと、直に惟任光秀に、饗応の役をぞ命ぜられし、御諚畏みせし

光秀に謀叛する要心得たし、都の手勢見せばやと、中にも国出
住馬勢へ、才ン小人数の言ふにも足らぬ兵、着々過ぐるの詠なる義
心暗鬼は信長の、紛ふ宿あり時も時、羽柴秀吉中国へ
援兵の任なれば、厳命忽ち光秀の、首の上するか
あらん」と光秀思はやしく、我もほくそ笑みて、羽柴が命
ふ渡へとは、南なる才の戒めやと、嘆きがなくて悔みしは居ふ
いふる人馬のふしきあるまいき」すると言長が見る時は

右大将と仰がるゝも此上、驕奢の振舞いと多く、或時は蘭丸をなし、
光秀が首へ鉄扇を加へさせ、又ある時は好まぬ酒をたれ、
さしも更にまつ幾億か遠しくすめへかへ、志賀の都も領地なく、
三年のいくおほえすゝぎなかりし、奪ひ取られし説かなき、今またも
[illegible]が館まで、新たに来ませし家康に、心尽しの饗なし、
琵琶湖の水の泡と消え、招つし宿もらくして、をはりし思ひの光秀の、
拳を握りてはつたと上る、動く目毛の間より、由々敷大事

のほのみえし故、鶯ほど知らぬ信長は、近江なる安土にとらく宮を造営し、
纔か近臣百余人、引き従へつゝ京都なる、本能寺まで入り給ひし。
時すでに謀叛の光秀は、国宜を遁げて亀山に、従者等
諸将お召しよせて、積る恨の数々を、数へつくろふ光秀が、謀
は血汐ほとばしらせ、逆立つ髪は冠を突く勢なる男気を顕はし、
光秀どのが百千度、信ずる言葉と聞はずして、推して謀叛に
加盟させ、暴戻無道の悪逆をば企てしが、扨お聞しまれ。

斯くは未だ年若からぬ頃え、中国勢を助けんと、却って向ふ大江山、

心の駒を烏羽玉の、暗路なく急ぐ身ながらも、せし其の忠義の光秀

おゝ追ひ来る老の坂、如何なる道を迷ひすとも、無念空しき柱乃

叛の時」、乱れそむ濁る桂川—渡らく駒の足なすみは東すらく

ぶしく忍びてゝくふ

本能寺溝深幾尺、吾就大事在今夕、

茭粽在手併茭食、四簷梅雨天如墨

老坂西去備中道　揚鞭東指天猶早
吾敵正在本能寺　敵在備中汝能備

こゝにはじめて軍勢は、やゝ心とさとりしか、されども戦争せひもなし。捨つるのはひとくもし。時しも、六月二日の朝まだきに、寂の一ゑくのうち軍兵が、塀をこえ、時ならぬ人まこのさわぐに、驚度を水ましも、ゑやへ入まするに、物音に信長は、寝覚の耳をそばだつれば、伝ふ方

×××××　××××××××××××××××××

もう一人鳴の声、館近くきこえては、枕を離れて立ちとまる、疾

く見届けんとあせるまに、森の蔭を一すぢの道、おもて

のかたの透き間より、見えし灯の影か淡く燈のけしき、宿守をか

ぐして見へてあくがるゝ、袖ての小袖の袂に包て、縁先なる結

檜の役所に見ゆるゝに頭を門のくゞり、表の格子錠をとらへ

かゝりて、帰といふのをて搔出して、それも覚悟とらば

はかなくし、気も失おろとつ足をさまかくひ、宵の一せ萩ふ

激戦とはいへども、さえぎるものなく数十騎と、決
絶叫に附て打とし、勢ひすさまじくみせしも、忽
ち敵と信長が、たのむ所と頼みし、と持ちし得た
る兵、築き付ける数ふる敵なし、すのすぐ斬って従
せ、奥雑する時、信長は、左軍の後と備手は崩れ、
蘭を代くみせもうら、宿直の者も遠くして、輪
を開け戦へど、血気盛の敵もなく信長は、最早

かつきまくらん「思ひおもむ」、自ら館に火をはなたんとて、煙の中にうかび出て」、刃に伏しつゝ「果てにけり」。嗚呼豪邁の信長が」、空をも蓋ふ大鵬の、図南の翼中空に、燕雀のたぐひにやぶれまくとせし」、佞臣の逆みだれたるは、獅子身中の虫にくらはれたる、惜しさよ。なほしきりつゝ人々の、目に涙するも痛ましき」、愛めて蘭丸を始め思ひしも」、坊丸・力丸の小姓ども、今ぞ若木の桜花」

嵐の山の朝風に　いとゞ残す香なとゝて　散るやすらま

くはしやすさに　百有餘人諸共に　宗とせ木解時の潮

煙と消えにけり」

解き得たる心ゆるすたまずしのみ

枕とはぬなまよみかゝる世の中

徒古今を按ずるに　人で君たる王侯の　心すなほで徳

ホナウ　心すなほは徳にすゑそ　止

大正貳年七月一日印刷
大正貳年七月五日發行

【定價金三拾五錢】
（送費金四錢）

不許複製

琵琶歌音譜集

編輯者　帝國薩摩琵琶歌同好會

發行者　朝野文三郎
神田區橋本町二丁目五番地

印刷者　中山千二
東京市麹町區飯田町五丁目六番地

印刷所　大正社印刷所
東京市麹町區飯田町五丁目六番地

發行所　朝野書店
東京市神田區橋本町二丁目五番地
振替口座東京一六七五

重田蘭溪先生著　中野彪先生校訂

ノート孟子

全壹册　洋布天金　八百六十餘頁　縱四寸八分　橫三寸

定價金壹圓　送費金八錢

由來我國は仁義の國なり。仁義の國民にして、仁義の眞味を解せざるは、醫にして病を知らざるにひとし。只この一本によりて、仁義の深理を解し得るは、眞に吾人の幸福といふべし。內容は論語と同じく上欄に原文、下欄は譯文總平がな附何人にも讀み易し。

重田蘭溪先生著　中野彪先生校訂

ノート學庸

全壹册　洋布天金　百八十餘頁　縱四寸八分　橫三寸

定價金三十五錢　送費金四錢

既に論語と孟子とを座右に供へ、散策に携ふることを得たれども學庸の鈌けたるは龍を畫き上げたれども一爪の鈌けたると同じにて何か、物足らぬ心知の爲らるれば、玆に學庸を發刊して龍をして天に躍らしめんとす。諸子論孟の鈌けたる一爪を補ひ給へよ。

理學士小山一郎先生監修　佐藤仁壽先生編纂

最新刊

最新問題 模範算術通解

四六判上紙印刷
洋裝頓美本全壹册
定價金壹圓
郵税金拾貳錢

學生諸君の最も至難とする所にして而も諸學科中最大主要の地位を占むるものは算術にあらずや之が爲に新著月刊頗る頻々たりと雖も未だ良著として推奬するに足るもの少し著者茲に見るあり學生諸君に對し深切なる同情を以つて最も經濟的に最少の時間を以て最大の實效を得しめんことを期し現行敎科書中より模範的問題を蒐集網羅し之に平易簡明なる解法を施し如何なる難問にても立ろに解決することを得しめたり尙且各種敎科書との關係を索引によりて容易に知らしめんとしたるものなれば學生諸君一本を机上に置く時は恰も完全の辭書を備ふるが如く其便益と效果の大測り知る可らず

本著の特徴　●算術の各種問題を網羅す●解法の親切叮嚀而も簡明なり●其問題二千有餘題に達す●而も紙面の利用を巧ならしめたるが故に價廉なり●現行中等算術教科書との活用自在●獨學者、入學準備者、學生諸君の算術辭典なり●問題索引の便利

梯山佐藤信哉翁題辭　文學士上田龍嶽先生著

最新刊

振氣興風 高吟詩集正解

三六判天金洋裝美本全壹册
正價金卅五錢
郵税金六錢

本集は専ら青年學生をして諷詠の間にその氣風を振興しその思想を剛健にせしめんが爲め其の詩作者も志氣剛壯忠憤義烈の士に多く作者の爲人を思ひその詩となつた情狀を明に解し本文に和訓返點を施し更に和譯傍訓したる吟讀を添へ其の上一句一句に之が解譯を加へ其難句難字は一々之を鼇頭に摘出して重ねて詳解し特に卷末附錄としたる新詩作法は作詩上の最卑近の階梯として著者の新案一至便法なり

重田蘭溪先生著　中野彪先生校訂

ノート論語

全壹册クロース表紙
縱四寸八分橫三寸
定價金五拾錢

金縁美本
五百廿餘頁
郵稅金六錢

我が東洋の倫理界に、二千五百年の長壽を保ちながら、矍鑠として尙一方の重鎭たる論語は目下世に行はれつゝあるもの或はその解の難に失して、妙味を嚙出することは能はざるあり。或は易に陷りて、論語とは、かくも無味のものなるかと、疑はしむるものなきにしもあらざるを以て本書は特に數本の中にて、難に失せず、易に陷らぬ碩儒重田蘭溪先生の原著を得、之を中野彪先生に囑して校訂し、世に公にす。請ふ一本を机上に供へて、その妄ならざることを證せられよ。今本書の特長の二三を左に掲げん。

本書の特色

解釋（難字難句は丁寧に之を釋し、各章章意を簡潔に說きたるを以て、論語の妙味を玩味せんとするには最良の友なり。

内容（上段には論語の本文を掲げ下段にその譯文を假名交り總ふりがな附にて載せたるを以て、之を對照して繙讀する時は漢文學の素要を作ることを得るなり。

製本（裝釘は嶄新なる意匠により、最も高雅に、且つ携帶に便なる小形となしたれば、机上におけば裝飾となり、郊外散步には、修身富豪の良師となることを得るなり。

容積（紙數は五百廿餘頁の多數なるも舶來紙に印刷してその容積はポツケツトに入るゝに足るべく、しかも定價は僅に金五拾錢の廉價なり。

帝國薩摩琵琶同好會々長宮田秋堂先生作曲并編

増補

曲譜 明暗

薩摩琵琶歌百練集

三五判 曲譜 朱刷

花の巻壹册
月の巻壹册 各册 定價金三十錢 郵税金四錢

花月合巻 上製本 壹册 定價金五十錢 郵税金六錢

本書は曲譜詳密にして歌詞章句を上下二段に并例し讀易からしめ携帯至便なり（目次左ニ）

花の巻目次

明治天皇（石版二度刷挿入）

金剛石○天長節○仰げや仰げ○芙蓉峰○春日野○武藏野○夢○送別○七卿落○櫻狩○快報○日本の赤十字○國の譽○老蘇の森○怨の雪○籔ふれば○櫻井驛○河内宿○吉野奥○阿新丸（初、二、三、四段）○元寇の仇波○毒饅頭○阿房宮○鉢の木○城山○常陸丸○錦の御旗○吉野落（上、下）○威海衞○武徳殿○小敦盛（上、下）○河中島○旅順口○落花の雪○廣瀬中佐（上、下）○受降ヶ岡○義士討入○上杉謙信（上、中、下）○閉塞隊（上、中、下）○形見の櫻（上、中、下）

月の巻目次

乃木大將（石版二度挿入）

平壤○春の調○千代の翠○國の礎○蓬來山○若木の花○國船○月花○五月雨○花の木○國の御柱○螢雪○母の誠○靈鷹○母の敎○別れの國歌○桐の落葉○葉山の御夢○玄海灘○忠度○國讃○大和魂○辨の內侍○石童丸○小督○王政復古○日本海々戰○俊寛（上、下）○臺灣入○本能寺○上村艦隊○吹雪の敵○橘大隊長○橋辨慶○那須與市○白虎隊○王照君○巴の前（上、下）○賴朝七騎落○潯陽江○太田道灌○雲の籬○能褒野○金ヶ崎○武士道○大海戰○三方ヶ原○大石兵六夢物語○九連城○噫伊藤公○六號潛水艇○源爲朝

賴山陽先生原著　文學士上田景二先生譯註

最新刊

原文摘入 譯文日本外史

博物館御所藏原著者肖像眞筆特寫許可挿入

三五判舶來上紙
天金箱入美本
千四百六十餘頁
定價金壹圓五拾錢
小包送料金拾貳錢

壹萬部限り
特價
金一圓廿錢

本書の特色

本書は日本外史の全部を訓譯したるのみならず。その評論の全部と其文章の妙所と其史實の要所とは原文を摘出して之を挿入せり。是れ訓譯に頼て日本外史の何物たるかを容易に知らしめ、更に原文と對照して著者の才氣とその妙文とを味はしめ、一方には目下教育上の懸案たる學生をして漢學の素養を助けしむると倶に他方には學校其他文武士吏の登用受驗に便益を與へんが爲めなり。

本書の訓譯は終始現代的のものを用ゐたれば普通學校に於て用ふる訓譯と撞着する所なし。全文に於て其難字難句は一々之が解釋を加へて鼇頭に揭出せり。其地名の如きも一々其所在を明にして是亦鼇頭に揭出せり。

史實を探り易からしめんが爲に標題を鼇頭に示し且又之を目次に並列して其頁數を附記す。全篇中處々原文に無き者を加へあるは讀者をして史料の據所と原著者抄譯との別とを知らしめんが爲なり。

原文の返點に於て其虛字助字に一々返點の符號を加へたるは初學者の便を計りてなり。

發行所　朝野書店
東京市神田區橋本町二
振替口座東京一六七五

王置房松

FOR USE IN
LIBRARY
ONLY

ML
1015
B55S37
1913
c.1
EAST

BRITTLE SHELF